「日々の理科」（第 2114 号）　2020,-4,23

「切り株と格闘する（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

※2019 年秋の活動記録です。

切り株の中には、「生き残る切り株」と「死ぬ切り株」がある。「生き残る切り株」は生命力にあふれてすばらしいのだが、「格闘する」には厄介な存在だ。

たとえばこれは、裏庭の「クリ」の切り株である。もう切ってから数年経つが、生きている。根が生きているのだ。根元からたくさんの枝（不定芽）を出し、毎年葉をつけている。こういう切り株は、掘っても掘ってもやっつけることはできない。一番強いのは、恐らく「クワ」で、どんなに根絶やしにしても、必ず枝を出す。そういえば、クワ畑の幹は、どんなに強剪定しても、すぐに青々と葉を茂らせる。

こちらはカラマツの切り株。「死ぬ切り株」の代表である。10 年ほど前に、職人さんに切ってもらったが、一回も芽を出すことなく、少しずつ朽ちてきている。それでも太いので、人力で掘るのは無理そうだ。

もとのカラマツはこのぐらいの太さだった。これを伐採するにはチェーンソーが必要だが、倒す方向を間違えると、建物に被害が出る。倒す側にワイヤーを張って、絶対に逆に倒れないようにする。

カラマツは材としてはあまり人気がない。しかし、北軽井沢では戦後に盛んに植林されたので、どこにでも豊富にある。東日本震災の時は、応急建築の為に大量に供出された。私は伐採したカラマツ材で、ガレージを造ってもらった。

こちらは「モミの切り株」モミは成長が速く、若木のうちに切らないと、手遅れになる。このモミは 15 年前に切ったが、なかなか腐らず、居座っている。